

# 大阪港漁港区将来ビジョン

大阪市漁業協同組合

# 目指す姿

「大阪港の特色を活かした、水産を核とした魅力ある漁港区づくり」

～今後10年を見据え、漁業者人口が減っていく中、大都市大阪港漁業を漁業者のみでなく、地域に関わる人全員で地域の産業として発展させることで漁業収益を向上させ、漁業者人口を増加させる～

# 大阪湾について

大阪湾に流入する河川は、大阪、兵庫、京都、滋賀、奈良、和歌山の2府4県にまたがり、大きな流域を持っている。

そこから多くの土砂、森や陸域からの栄養分、生活排水が大阪湾に流れ込んでくる。多くの土砂は干潟を形成し、その泥には貝やゴカイなどの虫が多く、これが餌となって幼稚魚や稚貝が育つ環境となり漁獲する魚たちが繁殖する。

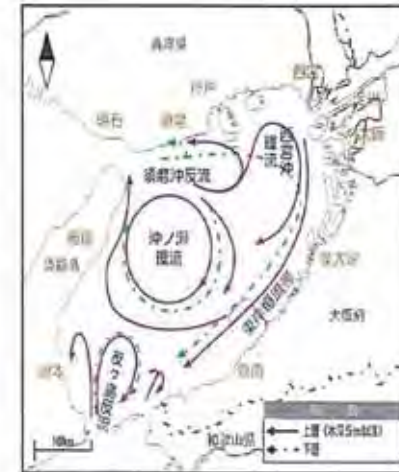
新淀川は平均淡水流入量が最も多く河口域は干潟、浅場が多く存在し大阪湾の中でも最も重要な幼稚魚や稚貝の育成場となっていた。高度成長期の地盤沈下により干潟や浅場がなくなりはしたが、現在海老江や柴島人工干潟がある。



大阪湾は干満時に明石海峡、紀淡海峡から大量の海水が流出入する。

大河川からの流入、干満差による流れによって豊かな海が形成されてきた。

巾着網でイワシ、アジなど、船びき網でいかなご、イワシシラス、流し網でさわらやスズキなど、底びき網で舌平目などが漁獲されている。





大阪市内には多くの漁村があった。



図1 摂津漁村図 (『漁村の研究』)

大阪湾沿岸地域には漁業権もあった。



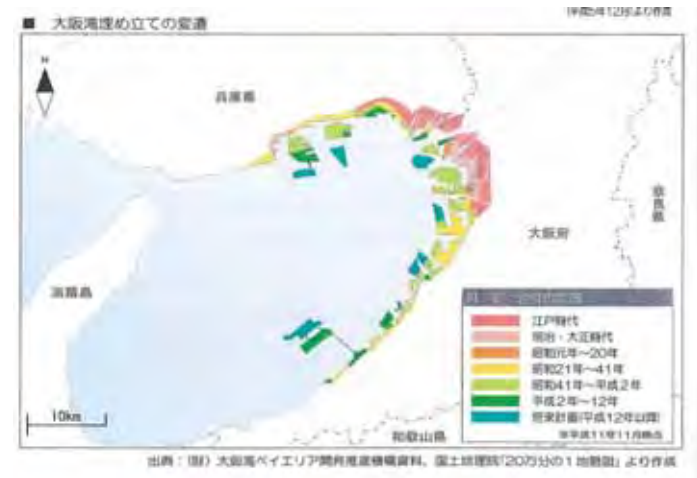
現在

### 大阪の海面漁業

大阪の海面漁業は、古くから行われてきた。特に、大津島、大津島漁村、大津島漁業協同組合など、多くの漁村や漁業協同組合が存在する。これらの漁村や漁業協同組合は、大阪湾の海面漁業を営んでおり、大阪の海面漁業を支えている。



昭和の高度成長期から平成にかけて関空、神戸空港など大規模な埋立が進み、大阪湾の面積が狭くなるとともに干満時の流出入が減り、潮の流れが悪くなった。



高度経済成長期に赤潮により「海がきたない」と言われることがあったが、その色は植物プランクトンや動物プランクトンで、その当時魚はよく獲れていた。

現在漁獲量は減っており資源管理を行いながら漁業を営んでいる。船びき網で獲るイワシシラス漁は4月～12月の期間水、土、日曜日を休みとする週4日操業である。

## 地域の概要

江戸時代より漁業が盛んで、主要な漁業集落としては、佃、大和田、大野、福、野田、九条、難波の七ヵ村が知られており、この中でも佃と大和田は徳川家康との特別な由緒から、全国どこでも自由に漁業を行う権利を有していた。昭和24年10月時点では組合員数300名余りを誇る府下有数の組織であったが、その後の大阪港埋立工事の進行などにより昭和44年9月に漁業権が消滅し、以降許可漁業で漁業を営んでいる。



所在地：本部 大阪市此花区常吉2-10-12  
支部 港区（港支部）、此花区（此花支部）、  
西淀川区（福支部、大野支部、大和田支部）

各支部の船だまりは昔の各河川の河口部であり、川が埋め立てられるに従って河口部へ移動せざるを得なくなり各河口部を利用している。各船だまりは河口部なので水深が浅く大型船は水深の深い本部に係留している。

組合員数

平成20年正組合員数64名、准7名、合計71名  
平成28年正組合員数39名、准9名、合計48名

販売高：1億3300万円（平成28年）

漁獲物

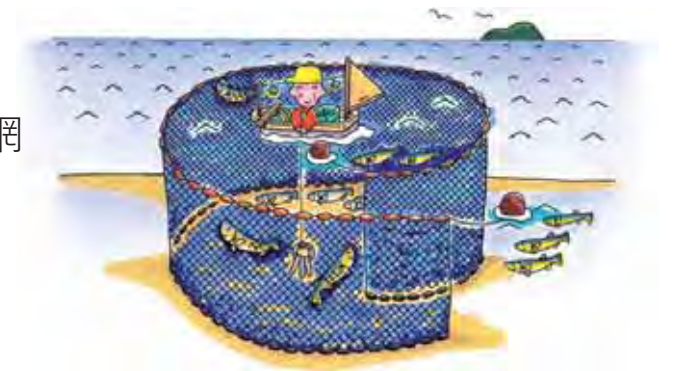
大阪湾、淀川河口域において

いかなご、いわししらす、すずき、ちぬ、ぼら、しじみ、うなぎ、はぜ、あじ

船びき網



罾刺網





## 大阪湾の漁場環境、水産資源、漁業経営他については「新・大阪府豊かな海づくりプラン」

- ・大阪湾の漁業生産力を底上げするための広域的な漁場整備の推進  
攪拌ブロック礁の設置、海底窪地埋戻し、海底耕耘、干潟・浅場の造成
- ・早期に効果が現れる漁場整備の推進  
地先増殖場の整備
- ・魚介類の生産にとって適正な栄養塩管理に向けた取り組み  
栄養塩の適正管理
- ・大阪湾の漁場環境や水産資源を支える水産資源を支える水産研究の強化  
水産研究の取り組み
- ・海域・河川ゴミの対策
- ・大阪湾の水産資源の増大とブランド化をめざした栽培漁業の推進
- ・漁業者による自主的な資源管理型漁業の充実
- ・関西国際空港周辺海域を活用した資源増大の取り組み
- ・淀川など河口域の魚介類資源の維持増大と有効活用



### 新・大阪府豊かな海づくりプラン

「はま」が潤い、豊かな恵みを「まち」に届ける海づくり



平成27年4月

大阪市地先の大阪港は港湾区域のため取組が行われていない。